

2024年3月発行

茨木御堂
第294号



真宗大谷派



茨木別院

(輪番 河原 恵)

〒567-0817 茨木市別院町3-31
TEL (072) 622-2903
FAX (072) 625-9445

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに願いがかけられている

音楽会



念仏には
無義をもつて
義とす

(『真宗聖典』 六三〇頁)

今年のお正月は、大きな地震から始まりました。令和六年能登半島地震です。被災された人たちのお気持ちはどんなでしょうか。何故こんな地震が起きたのか。どうして大切な人を亡くさなければならなかったのか。家がめっちゃくちやになり、道路も水道管も寸断され、食べるものも水もない。立ち上がる意欲も力も出てこない、等々でしょう。このような中、ある老婦人の言葉がテレビから流れてきました。「私はあの穴から助け出されました。夫も家の下敷きになったのですが、私は助かりました。夫が護ってくれたのだと思います。」そして、「立ち上がらなければ。一步でも前に進んでいかなければ」と言われました。さすがに真宗王国である能登の方です。どんな苦難に遭遇しても、そこから立ち上がっていく。助け出されたのちを前に向かって進めていく。そういう強い意志を感じました。

仏教は、生老病死の苦しみの中から、その苦悩を乗り越え生きる力をいただく教えです。何があってもそれを引受け、立ち上がっていく意志と意欲をいただく教えです。歎異抄の第一〇条には、「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおっしゃいます。と、親鸞聖人の言葉が記されています。念仏は、私たちの心からの心を超え、真実の言葉です。私たちのすべてを仏の本願力による賜りものといただくことの表現です。

念仏をいただければ、苦しみも私の生きる根拠であると信知することができます。苦しみを厭うのではなく、この苦しみの中から共に立ち上がる力をいただくのです。これを他力と言います。本願力と言います。自分を越えた願心が願力となって私たちを包んでいることを知ることが出来るのです。

能登の老婦人の言葉は、真実に生きることの大切さを伝えてくださっているのだと思います。

南無阿弥陀仏 輪番 河原 恵

茨木別院関連ホームページ

真宗教団連合ホームページ

茨木別院 ➔ ibarakibetsuin.or.jp

いばらき大谷学園 ➔ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

<http://www.shin.gr.jp/>

真宗教団連合

検索

茨木別院 月行事ご案内

● 教如上人ご命日・同朋会(どうぼうかい)

- ・日時 五日(火) 午後一時半より
- ・講師 加藤恵師
- ・会場 別院会館

● 本山九日講

- ・日時 九日(土) 午後二時より
- ・講師 茨木別院輪番
- ・会場 唯徳寺

三月

● 春季彼岸会 | お勤めと法話 |

- ・日時 二十一日(木)～二十二日(金)
- 午後一時半より午後三時頃まで
- ・講師 茨木別院輪番
- ・会場 別院本堂

● 親鸞聖人ご命日・婦人会例会

- ・日時 二十八日(木) 午後一時半より
- ・講師 茨木別院輪番
- ・会場 別院会館

四月

● 教如上人ご命日・同朋会(どうぼうかい)

- ・日時 五日(金) 午後一時半より
- ・講師 加藤恵師
- ・会場 別院会館

● 本山九日講

- ・日時 九日(火) 午後二時より
- ・講師 茨木別院輪番
- ・会場 圓福寺

● 親鸞聖人ご命日・婦人会例会

- ・日時 二十八日(日) 午後一時半より
- ・講師 茨木別院輪番
- ・会場 別院会館



● 本山九日講初講

今年も本山九日講が勤ま
ってまいります。その初め
として茨木別院にて初講と
して本山九日講の総会が開催されました。本山より那須信純
参務が出席され、御俗抄、御文の拝読と法話をいただき
ました。二月より当番寺院にて午後二時より九日講が勤
まっています。以前のような活気のある講を開催して
いければと思います。
たくさんの講師の方
のご参加をお待ちし
ております。



● 教如上人御命日・同朋会

茨木別院開創の教如上人の御命日を機縁とし、同朋会を
開催しています。現在、『歎異抄』をテーマに共に学びを進
めています。有縁の方々のご参加をお待ちしております。

『歎異抄』を読む人のために

私たちは、(中略)この『歎異抄』を読むことをとお
して、生きた親鸞聖人にお会いする道をいただくこ
とができるのです。

寺川俊昭師・『歎異抄』東本願寺出版より

日程 毎月五日 午後一時三〇分から午後三時ごろまで
会場 茨木別院会館 一階
講師 加藤 恵師(茨木市・教圓寺住職)

令和五年度 当番	会所
2月	教行寺
3月	唯徳寺
4月	圓福寺
5月	是三寺
7月	榮久寺
8月	西方寺
9月	浄真寺
10月	光得寺



園の子どもたちへ いばらき大谷学園



安心できる場所

保育教諭 吉田 泰子

今年度も残りわずかとなりました。赤ちゃんだった0歳児クラスの子どもたちも、歩けるようになったりご飯を食べるようになったり、大きく成長しました。

早く歩き始める子、ゆっくり慎重に歩き始める子、たくさん食べる子、じっくり味わって食べる子。どんなに小さくても一人ひとり違う成長がありました。ほかの子と比べて心配する声もありますが、「やってみよ

園での給食の大切さ

栄養士 前田 香織

一年間の園生活でたくさん思い出を作り子どもたちの成長を共に喜ぶことができたことを心より感謝します。

四月は食べるのが遅かったり、好き嫌いが多かったり、食べる量が極端に少なかったりと様々な子がいました。今では時間通りに食べることができ、嫌いな野菜も食べられる

う！」と思った時がその子の成長のタイミングです。その目がキラリと光った瞬間を見逃さないように見守って「やってみよう」をサポートするのが保育者の役目です。でも、新しいことに挑戦する前は不安や葛藤があるもので、抱っこを求めたり、膝に座りに来たり甘えん坊になりま

す。その気持ちがいっしょに受け止められ、安心すると子どもたちは自分から挑戦しに出かけます。いろいろなことに興味を持ち、やってみようとする姿の土台は安心感です。この安心感が「あきらめない

ようになりました。そして食べる量も少しずつ増えました。「給食楽しみ」〇〇が美味しかった」などの言葉がとても励みになりました。

五感の記憶に結びつけて「美味しかった」「楽しかった」「見た目可愛い」と思い感じながら食事をしている経験を積み重ねていくことで、食べられる種類が増え、食べるのが好きになります。逆に「怒られながら食べた」「無理やり口の中に入られた」「不用意な言葉をかけら

れ」思いやりの心」を育みます。私は保育者として子どもたちにとつての安心できる場所でありたいと思っ

ています。安心して新しい世界へ飛び込んでいく子どもたちの大きくなりたい姿を、折に触れお父さんお母さんは何度も見られているのではないのでしょうか。

三月、四月は環境が変わる季節です。お子さんが甘えにきたときには、たくさん抱きしめて不安を安心に変えるパワーをあげてくださいね。私たち保育者も子どもたちにたくさん

の安心を育みたいと思います。園で「マイナスに感じる嫌な体験をすると、食べることが嫌になることが多いので、常に食事を意欲的に楽しく食べられることを意識して、提供するよう心がけています。子ども達が今後とも元気いっぱい過ごす事ができるようにしっかりと栄養バランスを考えた給食作りを取り組んでいきたいと思



令和五年十一月十五日 日中法話

「無量寿に生きよう」②

講師：延塚知道師（大谷大学名誉教授）



親鸞聖人は、南無阿弥陀仏の本願の教えが、自分の身全体を貫いて救われた。その感動が「帰命無量寿如来、南無不可思議光」、「正信偈」の冒頭の二句に表されています。分別では量れない、無量の仏さまのいのちに、私のいのちを帰します。自我のいのちではなく、仏さまの

いのちをいただいて、今も仏さまの世界に生かされて、やがて仏さまの世界に帰っていく。その本来のいのちに目覚めたのです。

それは、私と執着する根性を突き破って、南無阿弥陀仏のいのちが名告りを上げたのです。お釈迦様の教えは、覚りからのことばですから、人間が人間の立場で考えたのと質が違います。

もしその教えが届いたなら、人間が逆立ちしてもわからないことを見抜かれたのですから、教えが光という意味を持ちます。それを「南無不可思議光」と、教えています。ですから本願の教えは、自我の私を後押ししてくれる座右の銘などではなく、自我を超えた「無量寿」の世界に呼び戻す、光としての教えに出遇ったと、教えてくださっているのです。

私の連れ合いが八月二十一日に、亡くなったばかりです。白血病でした。人が亡くなっていくのは大変です。「なんで私がこんな病気になるの。私は何も悪いことはないし一所懸命に生きてきた。なんで私だけ先に死ななあかんの。もつとあなたと一緒にいたかった」と、何回泣きましたか。

それに対して家に一匹猫がいます。私が出るときは猫の訪問看護を雇って、エサやオヤツをやってもらいます。人間は自我の理性だけで生きていると思っていますが、そうでしょうか。だってみなさん、種を植えて芽が出てきたら嬉しいでしょ。花が咲けば「咲いた、咲いた」と、元気になるでしょ。それはいのちといのちが交感しているからです。猫もばーばが亡くなったことを、わかっています。夜中にトイレに連れていくと、走ってきて車イスの周りをぐるぐる回る。最初は危ないから怒っていたのですが、よく考えると、私が一人でトイレに行く時に

は来ないのです。つまり、ばーばを心配しているのです。一年間病院で抗がん剤を打って、時々帰ってくると痩せ細っていく、小さいおばあさんになって、最後には玄関も自分で上れない。それを見ているから、猫でもばーばが危ないと感じている。だから、もし人間やったら車いすを押すのにと、心配していたのです。「ごめん、ばーばは大丈夫やで」となでてやると、向こうに行くようになりました。そんな風に、理性よりも根源のないのちのところまで通じ合っています。ヒマワリが太陽に向くように、いのちは弱い人の方に向く、可哀そうな人に向くのです。私たちのいのちは、あらゆるものと感応道交しながら生きています。そういう世界が忘れられて、私がついう自力を中心に生きるのが、私たちの日常生活です。

自我がどうして生まれたか、人間には分かりません。気が付いた時には、人間になっていくからです。それを仏教の智慧に立って、解説してみましよう。

ほかの動物との違いは、人間が言葉を持っていることです。最初に喋ることは、「マンマとブーブー」です。だからこの世で、一番苦勞するのは食べることです。その次に、周りの人呼びます。「パパとかママ」とか、呼ぶようになります。名前を呼び合うことで人間の関係を確認しているのです。ですからこの世で、食べることに次に苦勞するのが人間関係です。人を呼べるようになる

と、パパとママとジージとバーバがいる。友だちがいて保育園の先生がいてと、ことばで人間関係が広がります。さらに呼べるようになったコンビニに、行くようになります。そんな風に、ことばによって世界が広がっていくのです。

周りがわかるようになると、それに対して自分を意識するようになります。自分への意識が結実して、三歳か四歳ぐらいになると、「私」と言うようになります。そのようにして自我が生まれると、他人と自分との間がわかって、人間になるのです。ということは、自我は周りに対して「私」と言えた。つまり自我の本性は、比べるということです。人間は善悪を比べて苦しむようになり、いいものになりたがる。だから必ず理想を追いかけて苦しむようになるのです。

それまでは、仏さまの世界で生かされていたのに、「私」と言えるようになった途端に自分を中心にしか考えられませんか。私のいのち、私の家族、私の世界と、全部私を中心に世界に替わって、本来の仏さまの世界を失った。そして自分の世界が絶対だと執着して、比べることで人間独特の苦しみが起こるようになるのです。

人間は戦争や自殺に象徴されるように、解けない問題に苦しんでいます。にもかかわらず、万物の霊長だと威張って、自分だけが正しいと譲りません。仏さまは、人間を超えた覚りから人間を見て、その自力の根性にこそ

地獄の本があると見抜いて、自我を超えた「無量寿」の世界に帰れと教えているのです。そこに人間がわからないことを見抜かれたという「南無不可思議光」の感動があるのです。これまでは解説ですから、これからは恥ずかしいのですが、よくわかるように私が本願の教えに出遇ったことをお話ししましょう。

私は九州の福岡と大分の県境の英彦山という山のふもとで生まれました。そこは、昭和二〇年十一月十二日に、大きな山が吹っ飛ぶという大事故があった場所です。小倉の駐屯地に莫大な爆薬があったのですが、終戦の頃に東京空襲を初めとして各地で空襲が激しくなりました。小倉の爆薬が空襲に遭えば北九州が吹っ飛ぶというので、その爆薬を、私の住んでいる大きな山のトンネルの中に避難させたのです。ところが終戦になって進駐軍は、日本人が火薬を持っているのが許せなかったのです。ようね、トンネルの両方から火をつけたのです。火が茅葺屋根の民家に燃え移り、村の男衆のほとんどが出て消火活動していたのですが、一時間ぐらいで大きな山が吹っ飛んで、その男の人たちを中心に一瞬のうちに一四七名の人々が亡くなり、二〇〇名程が重軽症でした。英彦山の村は五〇〇戸ほどでしたが、家は倒壊し田畑は三メートルほどの砂と岩に埋もれて、村はほぼ全滅でした。進駐軍は、新聞やラジオの全てを報道封鎖して、その事件

はなかったことになったのです。私のお寺はご遺族が建てた寺だから慰霊塔が建っていて、未だにご門徒が一件もありません。ネットで「二又トンネル爆発事故」と調べたら出てくると思います。

亡くなった方のほとんどが男の人でしたから、残された人たちがどれほど苦労したことか。今のようにボランティアや重機なども無いし、岩や泥や砂をすべて手作業で運び、家や田畑を元通りにするだけで四、五年もかかりました。私は昭和二十三年生まれですから、生まれた頃に、やっと作物ができた。だからすべての人が極貧でした。

私の父親は、そこから一時間程離れたところに住んでいて、坊さんになったばかりでしたが、その事故を知って何を思ったのか現場に駆け付け、一〇〇人以上の遺体の一人ずつに枕経をあげたそうです。枕経をあげている内に、私は「残った人たちと一緒に生きて、一緒に死んでいきたいと思った。」と書いていました。爆風で倒れ掛かった消防ポンプの倉庫が、お寺でした。だから遺された方が毎日そこに来て、みな泣いていました。私は、その消防ポンプの倉庫で生まれました。

みんな極貧でしたが、周りのおじいちゃんやおばあちゃんに育てられました。ほんの少しのお米を「ボンちゃんに食べさせてあげて。」と、持ってくるのです。それを

お粥にして食べたのが、どれだけ嬉しかったか。優しさが命に浸みて、子どもの私でも、涙が出ました。一週間も食べるものが無いと、両親はよくケンカをしていました。しかし父親は最後には「仏さんに任せたらいい。」と言うだけでした。子供の私は「何を言っているのや、すべて母親に任せているくせに。」と、そんな父親が大嫌いでした。食べることは母親がどれだけ苦労したか、ねぎのひげまで食べさせてくれました。父親は自分の生活も顧みないで、人のために一所懸命働いて、帰る時に大根一本ももらってくるという生活でしたから、貧乏でした。

幼い頃は周りの方たちに育てられて、うれしかったのですが、中学校、高校に行く頃には、学費も払えないぐらい貧乏なのが嫌でした。ところが、「お坊さんになれ。」とみなが言うのですから、「冗談じゃない。」とふてくされていました。人間は目が外に向いていますから、自分の思い通りにならないと、周りが悪いと思う。ですから父親への捨て台詞は、「こんなところに生んでくれと頼んだ憶えはない。」というものでした。今思えば父親も偉かった。「選んで産めるものなら、お前みたいなバカは産まなかった。」と言いました。産む方も生まれる方も選べない。だから生まれた場所と生まれた自分を、まらんと自分自身と言えるものになるか、それとも周りを恨んで死んでいくか、お前の勝手だと言いたかったのだと思う。けど子どもの時には、「こんなやつに絶対なる



か、なったらダメなのは坊さんだ。」と思っていました。

私を助けてくれたのは、周りのおじいちゃんやおばあちゃんでした。海のように優しくかった。「大きくなったらお坊さんになりなさい。」とみんなが言いました。普通なら「頑張って立派なものになれ。」と言うはずですが。ところが親鸞聖人の教えに生きる者になれと言うのです。幼い頃は「お坊さんになる。」と言ったら、大好きなおばあちゃんが、喜んでくれました。仏教はわからなかったのですが、好きなばあちゃんが喜んでくれると思って、聞かれる度に「お坊さんになる。」と答えています。そのことが身に沁み込んで、恥ずかしい話ですが大学生になつてうつ病になって、死んでしまおうと思ったときに、そのおばあちゃんが出てくるのよ。「ボンちゃん大きくなったら何になるか。」と。この命に沁み込んだばあちゃんの優しさが、私を捨てないで、仏教に向かわせたのだと思います。「大きくなったらお坊さんになつてくれ。」というお育てがなかったら、私は死んでいたと思う。また続きをお話ししましょう。

茨木別院 事務所受付 お知らせ

●事務所受付時間

平日 九時～十七時

土・日・祝日 九時～十六時三十分

*法務等で事務所が留守になっている時間があります。ご用事がある場合には事前にご連絡いただき事務所が開いているかご確認の上ご来院お願いします。

●茨木別院事務所

☎072162212903

*月忌参り、法事等の申込については電話での連絡も受け付けています。

*須弥壇・合祀納骨の申込については、電話での対応も受け付けていますが、それぞれ納骨予定日までに申込用紙を取りに来ていただき提出いただく必要があります。

*土・日・祝日の対応について、時間帯によって電話がつかない場合があります。

茨木別院 本堂・墓地

参拝時間についてお知らせ

●開門時間

平日・土 七時頃

日・祝日 七時三十分頃

●閉門時間

平日・土 十九時頃

日・祝日 十六時三十分頃

*本堂並びに墓地への参拝については、開門時間内にご利用いただきますようお願いいたします。

敬 弔

ご生前のご遺徳を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

記

●法名 釋寶典

俗名 寺北典男 九十六歳

●法名 満徳院釋尼法喜

俗名 古川牧子 九〇歳

●法名 釋明利

俗名 大西利昭 九〇歳

●法名 釋世雄

俗名 北上幹雄 九〇歳

●法名 常護院釋尼光照

俗名 坂 光江 九十一歳

編集後記

三月は、お彼岸の時期になります。たくさんの方がお墓参りに来られます。お墓を掃除してきれいなお花を供えていかれます。お彼岸の時期には、お墓だけではなくお家のお仏壇も立派に荘厳し、きれいなお花を供えていただいていると思います。お墓にお参りすることも大事ですがお寺やお家のお内仏にも手を合わせていただければと思います。

竹内明人

株式会社 花 廣

茨木市大手町二二一八

☎(072)62212402

— 生花・供花・けいこ花 —